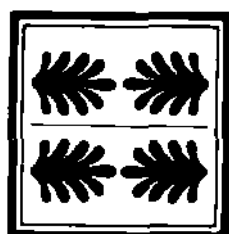


迷路の旅人

倉橋由美子





講談社文庫

迷路の旅人

倉橋由美子

昭和50年 6 月15日第 1 刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京 (03)945-1111(大代表)

振替 東京 3930

デザイン 亀倉雄策

製 版 株式会社まゆら美研

印 刷 東洋印刷株式会社

製 本 有限会社中沢製本

© Umiko Kurahashi 1975

Printed in Japan

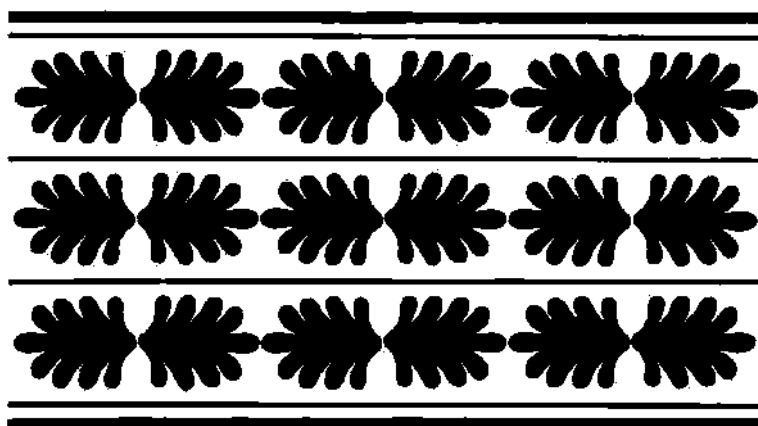
定価はカバーに表示してあります。

(落丁本・乱丁本はおとりかえます)

講談社文庫

迷路の旅人

倉橋由美子



講談社

目次

I

反小説論

二

II

雲の塔

一五五

神と人間と家畜

一五七

子どもと大浴場へ

一六二

玉突台の上の文学

一六四

神々の深謀遠慮

一七五

親友

一七八

Mathematics is a language

一六〇

あまりにホットドッグ的な

一八三

正義派

一八六

やさしさについて

一九九

自然食の反自然

一九六

美少年と珊瑚

一九八

アイオワの四季

二〇一

評伝的解説——島尾敏雄

二一二

英雄の死

二二四

女の味覚

二三四

私の小説と京都

二三七

東京の本物の町

二四一

育児日記

二四五

素人の立場

二五二

書と文章

二五六

「兄弟は他人の始まり」について

二五九

文明の垢

二六二

花鳥風月

二六五

己を知ること

二六七

新しさとは何か

二七〇

歌は優雅の花

二七五

わが敬愛する文章

二八二

風信

二八六

幼稚化の傾向

二八八

子は親のものか

二九二

「反埴谷雄高」論

二九六

「自己」を知る

三三〇

心に残る言葉

三三四

沖縄に行った話

三三七

Ⅲ

遊びと文学

三三七

あとがき

三五六

年譜

三六一

迷路の旅人

I

反小説論

一

詩が踊りに、散文が歩行に似ているといった種類の譬^{たと}えかたはいろいろあつて、たとえば散文は散歩のようなものだともいえる。アランの *propos* などは確かにそういうものだという気がする。また別の見方をすれば、あの *propos* のような散文は**即興演奏**でもあつて、**精神の自在な運動**がそこにあらわれている。即興演奏が音楽であるための最低の条件として、演奏に失敗がないということあげなければならぬが、その点でもアランの *propos* は即興の音楽であつて、アランの書く原稿には書き損じや削除や加筆ということがない。小説も、散文で書かれる以上、この性質を保存していなければならない。図面を引いて厳密に建てられた建築のような小説はつまらない。また線描の繰返しの跡が残ったり色の上に色を重ねたりして書きあげられた絵のような小説もつまらない。そういう小説は読者に精神の散歩を許さないのである。そしてよい小説というものは、しばしば人を散歩に誘いだしてそのまま遠い土地まで旅をさせてしまふ。

「私は以下のようなことをきいた」とか「人はこういつている」といった主節に従属節（ここでは名詞節）が続くという形のなかに、**物語**の形式がある。この約束が明らかであるかぎり、語り手は主節をはぶいて、*that*のなかだけを語ってもよい。その場合も、語られていることが、本来 *that* という蓋のついた従属節であつたという意識は失われていない。その *that* は、目には見えないが物語の冒頭に残されている。小説もそういう物語に属していて、それが誰かの作つた作り話であることを読者は認めている。しかし小説がただの物語でないのは、その誰かが、風のような、時には姓名不詳の、また時には多数の人間であつたりするのではなくて、明らかにその小説の作者にはかならないからである。そして小説がこのようにひとりの個人の意識的な作り話であるとする、個人が存在してそういう作り話を書くことができるような条件がない時代や社会では、小説もなかった。宮廷小説は、宮廷という社交の場があつて、それについて書いた作り話がそこで好んで読まれるという条件があつて出てきた。そういう狭い世間のかわりに市場ができ、そこで作者のわかつた物語が売れることになれば、小説書きがひとつの職業として成立つ。これは近代以後のことであるが、こうして小説書きが近代的な職業になれば、それを職業とする人間の書いたものが小説と呼ばれることになる。

一般に散文でもものを書く場合、書く人間と**読者**との関係は、公開の場で相対しているような関係から、密室のなかで自分をただひとりの読者に擬しているような関係まで、程度はさまざまであるが、ことばというものを使って書く以上、どんな場合でもそこに他人が介在してくることを考えないわけにはいかない。モンテーニュには *essai* を書きながらいずれこれを公にする気があつ

て、實際ボルドーのある書店から「読者に」という序文をつけて公刊したのに対して、兼好は徒然草を反古や写経の裏に書きちらしたまま死んだという違いは、大して問題にならないといえる。他人とつながらないことばを使うのは泥酔した男か狂った人間か幼児位のもので、他人の目を避けて書く日記でさえも他人に向ってことばを使うという形をとらなければ書けるものではない。実用のために書く散文ならなおさらのことで、その場合には具体的に限定された読者を思い浮べて書く。小説の場合、そのような読者を考えて書かれることは普通なくて、小説家にとって、読者は闇のなかにぼんやりと浮んでいる顔のようなものでしかない。それはなかば物質化した亡霊のようなもので、眼鼻も輪郭もさだかでなく、長く正視するに耐えないところがある。要するにそれは教室や講演会場に並んでいる多数の顔とは違うものである。他人の顔のように見えるものは、じつは自分から剝離して闇にさまよいでた自分であるかもしれない。小説家の立場からすれば、こういうものを「私のなかの彼（または彼女）」と呼んでおくことと便利である。小説家はそのような読者に向って書く。この関係が小説家に私的なものについて語ることを許す。そして実際に本を買ってその小説を読もうとする読者も、私室またはそれに相当するもののなかに自分を閉じこめた上で、闇のなかの人物から自分にあてて書かれた親展の文書を読みはじめる。そういう読者がじつは数千とか数万とか、ときにはそれ以上もいるということは小説家にとってまことに無気味なことで、それは丁度、分身の術を心得た女が日夜無数の分身で無数の男と構まじわっているのに似た気分を小説家に味わわせることになる。

ひとりの人間がいたとして、この男または女がいかなる魔に憑つかれて小説を書こうという気を

起すのか、これは誰にもうまく説明のできないことであるが、その人間がつれづれなるままに日を暮していることとか、性欲の発散とか、あるいは小説書きという職業がすでに成立していることとかが、一応の説明にはなる。しかしそれが小説でなくても、「心にうつりゆくよしなし事をそこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ」ということになるのだとすれば、とくに小説という形でものを書かなくてはならない理由は何であろうか。ここでは、すでに存在している物語に対するあこがれから自分でもその物語のようなものを書くという場合は除外しておく。この変形は、物語に対するひとつの批評として小説を書くことで、セルヴァンテスはそういう小説を書いた。これらはいずれもきわめて健康な行為であるが、ここではそうでない病的な面を考えるとすれば、その場合、ある人間が小説という形で特に書こうとするのは、公衆に公然と見せるのが憚られるような、**私的なもの**を他人に見せたいという欲求と関係がある。礼節を破って恥を搔く一歩手前で私的なものを他人に見せるための、きわどい工夫が小説なのである。そしてこれは小説が作り話であるという約束を利用してのことである。人間の身体にも私的な部分があつて、それを公衆に見せる場合に、仮面をつけて自分の顔を隠してしまえばひとつの救いになる。勿論ここでいう私的なものとは作者自身の恥部のこととは限らないで、男と女が人目を憚って行くことやそれに伴う感情の動きや、またひとりの人間がある思想を形成するにいたる経緯といったことも、ここでいう私的なもののなかに含まれる。そしてその種のことは、普通他人に見せても仕方のないことに属していて、それをそのまま文章に書く（ということも *confession* といえる）というしきたりは一般にない。それが誰か架空の人物に関する話だという約束が作者と読者の間にあつて、辛うじて（あるいは安心して、興味津々という態度で）それが読め

る。読むほうもこれをひとりで私的に読む。私的なものの分量の多い小説は、「小さな私的な部屋」で読むことはできても、大勢の人間の前で朗読するには適していない。そういう小説をいかがわしいというなら、小説には元来ある程度のいかがわしさはつきものであつて、英雄豪傑や神を主人公にした小説でも、彼らの心中に立ち入ったり、彼らが寝室や「小さな私的な部屋」で何かをする様子をのぞいたりするのが小説の本領だとすれば、小説とは、その点でも反トラゴディア的な性格を帯びるほかない。

他人の頭を踏みつけて踊ったり他人の衣服を剥ぎとったりすることにくらべて、自分の裸体を見せることのほうが多少でも**礼節**になつてゐるわけではない。小説家が自分自身を話の種に使う場合、その使いかたが *confessio* でなければならぬといふのは誤解であつて、大体 *confiteri* ということばがもとは神を目的語にとる動詞であることを考えないで *confessio* といつても、それでは何を *confiteri* するのかよくわからない。一人称で書かれた小説でも、それが小説であるのは作り話であるからで、この場合、虚構ということとは礼節の一種と考えることができる。虚構のない打明話、身上話の類には礼節に反するものがある。

歴史では私的なものが一切省略されている。ツークュデデースが示しているのはペリクレースの公人としての行動や演説であつて、彼が妻と交したかもしれない睦言や疫病にかかったときの身体の不快などは問題にならない。このあとのほうについても想像力を働かすのが小説家の仕事であるとするれば、小説は歴史を含んでいて、歴史よりも賤しい興味を充たしてくれるものだ